

「作家の値うち」 福田 和也著

荒さの中に日本文学への愛情

作家五十人ずつ、計百人の最新作を、主
要作品五百七十四点を百点満点で採点、簡潔
な作品紹介と作家論を付したブック・ガイド
である。

著者は、一九六〇年生まれの文学から政治
まで幅広くこなす評論家だ。多かれ少なかれ
偏差値教育を生きた一人で、自らがくぐって
きた点数評価法によって、今度はある種ゆる
みきった社会(文壇)に対し、反対に明快な審
判を試みた一品とも言える。だからというわ
けではないが、やや小型のB6サイズに、現
代作家と作品を小気味よく並列させ、さなが
ら試験直前の暗記本のようなものである。少々ヤケ
気味であっても、だがそこに若干の自虐的快
楽を見いだしながら蛍光ペンを走らせ、徹夜
していたときのことを思い出してしまった。

戦後民主主義への、著者自身の不信の姿勢
もあってか、自身は、個々の作家や編集者、読
者や出版界の、在り方や認識にまでさかのぼ
っていく。読んでいて、けっしてこれは東京圏
の文壇や作家の世界だけの問題ではない、と
考えさせられてしまうのは、勢いの成せる技
だろうか。その説得力の源は、おそらく、少々
荒さは目立つものの著者の一貫した評価基準
と切れ味のいい文体にあるといってしまうが
いい。対象からでるだけ虚像をとりはらい、
作品と文体に意識的でない、または感傷して
いる作者には辛辣な刃を飛ばしまくる。そし
て常に緊張感を持続し、新しい作品世界へ挑
戦しながら拡大深化させる者には、ジャンル
を問わず賛辞を惜しまない。おべんちゃらが
ないかわりに、けっして冷ややかな傍観者的
態度もなく、そこには著者の隠しようのない
日本文学への愛情が感じとれるのだ。

その意味でこの書は、いざれ著者に跳ね返
ってくることを承知で、批評家としての深い
自覚と責任の上に記されたものといってい
だろう。けっきょく、著者の叫んでいること
は一つなのだ。現在の「畏怖すべき作家のあ
まりの長期にわたる不在」その事実である。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)



飛鳥新社・1300円